

# 薬 理 学

【単位数:2.5単位, 授業35コマ(定期試験含まず)】

## 1 科目責任者

丸山健太 教授 (薬理学)

## 2 教育目標

### (1) ねらい(Ⅲ-3-c)

- ① コンピテンスの「医学知識と科学的探究心」を修得するために, 疾患の病因・病態・治療に繋がる基礎医学的な要素の理解を深め, 代表的な薬の作用機序を学ぶ。
- ② 薬の開発史を学ぶことで, 薬理学を一種の文化として楽しめるようになることを目指すと同時に, 薬理学にまつわる研究活動を俯瞰することで, 未来の医学を創出するための方法を知る。

### (2) 学修目標

- ① 受容体作動薬と受容体遮断薬の概念を説明できる。
- ② 薬物の有効量・中毒量・致死量を説明できる。
- ③ 薬物の吸収, 分布, 代謝, 排泄を説明できる。
- ④ 薬物相互作用を説明できる。
- ⑤ 主要な薬物の開発された歴史的経緯を説明できる。
- ⑥ 主要な薬物の個体・細胞・分子レベルにおける作用機序と副作用を説明できる。
- ⑦ 主要な疾患に対する薬物療法を計画できる。
- ⑧ 治験のプロセスを説明できる。
- ⑨ 主要な薬害を説明できる。
- ⑩ 薬の治療標的を探るための研究活動について説明できる。

## 3 成績の判定・評価

### (1) 総合成績の対象と算出法

	成績対象	割合	方法・コメント
定期試験	○	70%	多肢選択問題と穴埋め問題形式を原則とする。
中間試験	○	30%	多肢選択問題と穴埋め問題形式を原則とし, 1回実施。試験時間は40分とし, 終了後に解説を行う。 【再評価について】 やむを得ない理由で欠席した場合は, 追試験の機会がある。
態度	○	—	態度不良の場合は, 総合成績から10点を限度に減点をする。

出席: 定期試験を受験するためには欠席率が3分の1を超えてはならない。

### (2) 合格基準

評価対象の合計が60%以上(又は60点以上)で合格とする。

### (3) 再試験・再評価の方法

上記(2)で総合成績が60%未満の場合は, 再試験を実施。

再試験は定期試験に準ずる方法で実施し, 60%以上を合格とする。

### (4) 課題(試験やレポート)へのフィードバック

中間試験の解説は試験直後に講義形式で実施。定期試験については, 正答率が著しく悪かった問題に限り学年メーリングリストを用いて解説。

#### 4 教科書

書名	著者名	出版社	教科書として指定する理由
スライド (AIDLE-Kにアップロード)			

#### 5 参考図書

書名	著者名	出版社	参考図書とする理由
Goodman & Gillman's The Pharmacological Basis of Therapeutics	Laurence L. Bruton	McGraw-Hill Companies	薬理学学習のグローバルスタンダード
今日の治療薬	川合眞一ら 編集	南江堂	本邦で使われている医薬品を薬効群ごとに解説したベストセラー
Dancing Naked in the Mind Field	Kary Mullis	Vintage	全ての医科学者の必読書
人間この未知なるもの	Alexis Carrel	三笠書房	全ての医科学者の必読書
ノーベル賞からみた免疫学入門	石田寅夫	化学同人	生物学的製剤の歴史を理解するための必読書
本庶佑 生命科学の未来	本庶佑	藤原書店	免疫チェックポイントの発見史
病院の世紀の理論	猪飼周平	有斐閣	本邦の医療を理解するための必読書
エイズウイルスと人間の未来	Luc Montagnier	紀伊國屋書店	エイズ研究史の決定版
血液の歴史	Douglas Starr	河出書房新社	血液製剤の歴史を総括した名著
不死細胞ヒーロー	Rebecca Skloot	講談社	がん治療研究の礎となった細胞の開発史
自分の体で実験したい	Leslie Dendy and Mel Boring	紀伊國屋書店	自分の体で実験して世界を一変させた人々の記録
薬害とはなにか-新しい薬害の社会学	本郷正武 佐藤哲彦	ミネルヴァ書房	本邦の薬害史を総括した入門書

#### 6 準備学習（予習・復習）

- スライドの内容を予習（1コマあたり0.5時間）。
- スライドの最後に列挙した“重要な用語”を重点的に復習（1コマあたり0.5時間）。

#### 7 授業計画

##### （1） 講義の方法

大教室での知識伝達型講義に加えて、小グループによるアクティブ・ラーニングを実施する。

##### （2） 講義の内容

薬理学総論として、受容体作動薬及び受容体遮断薬の概念、薬物の有効量・中毒量・致死量の関係を概説する。ついで各論として、各種疾患に対する代表的治療薬の作用機序と開発史に焦点を当てた講義を展開する。最後に、薬理学の研究活動（テーマの選定、資金調達、論文作成）の全体像について概説する。